

石仏調査ニュース

ちがさきの石仏

第17号

発行

茅ヶ崎市教育委員会
茅ヶ崎市文化資料館

編集協力

文化資料館と活動する会
(民俗行事部会)

連絡先

〒253-0055

茅ヶ崎市中海岸 2-2-18

TEL:0467-85-1733

e-mail:shiryoukan@city.
chigasaki.kanagawa.jp

赤羽根のおしやもじ様

金子 栄司

「大山街道に点在する文化財を保全活用し未
来にむけて継承する協議会」による茅ヶ崎市内
の文化財を実地踏査するプレツアーに参加し
ました。事前に送付された資料のなかに「おし
やもじ様」が載っています。現物を見たことも
予備知識もなかったので手持ちの資料から樋
田豊宏氏が『資料館だより・No.52』に発表し
た「おしやもじ様」であらましを調べてみまし
た。該当する部分を書いておきます。

『上赤羽根 これは中赤羽根との境で、川口
養鶏の前の山(赤羽根山)で鶏糞を干してある
畑の中に木立にかこまれてある。

① 寛政十一年七月日(一七九九)

二十五 清譽

二十五が読みまちがいかも知れない。清譽とあ

るから、西光寺に関係ある人かも知れない。正
面には何も書かれていない石祠である。

② 「砂護神」

嘉永二酉年霜月吉日(一八四九)

とありこれも石祠型である。砂護神は社宮神と
発音がにている。

と書いてある。文中二十五が読みまちがい?
清譽とあるから西光寺に関係ある?』

と疑問符がついているのでプレツアー時に
確認することにした。当日、当該場所への道は
枝がついた竹で塞がれ立入りできない。

別の調査資料によると①の石祠には



「右側面 西光寺扣奉(二字欠損)建石宮

正面 中央を四角く彫込む(くぼませる)、

文字なし

二十五主清譽

左側面 寛政十一未七月日

「扣」は「控」の略字として用いられ、「控」には
幾つもの意味がありますが「扣奉」に「そばに
いて加護すること」の意を当てはめるとなんと
なく意味がわかります。「二十五主」と表すの
は珍しい。よく見かけるのは「二十五世」のよ
うに「世」です。住職を古くは「寺主」と呼んで
いたので「二十五代の主」ということかと考え
ます。樋田氏が「西光寺に関係ある人」と書
いたとおり西光寺の名が刻んであります。

②の石祠は

「右側面 嘉永二酉年

極月造立

正面 砂護神

左側面 忍(その下は表面が剥落していて分
からない)』

樋田氏の記述には「霜月(十一月)」とあったが
「極月(十二月)」だった。主神を「砂護神」と
「砂」を用いているのは珍しい。

おしやもじ様は喉の神、風邪・咳に効く神と
して信仰されている。おしやもじ様に当てられ

る漢字は誠に多い。それぞれ「しゃくし・しゃくじ」などと読むのですが、社宮司、神宮神、庶愚爾、杓子、鉤子、石護神、赤口神と表す。社護司社、咳(関)神社、射宮寺、杓子母神、石井神社なども咳の神で、また、諏訪地方のミシヤグジ信仰からミシヤグジ様・ミシヤグチ様と呼ぶこともあるようです。御左口、赤口とも書かれます。「砂護神」はそれらになかったものです。左側面「忍」の下が剥落して分からないのが惜しい。

おしゃもじ様が祭られている場所は個人が所有する地所。無断で立入ることはできません。樋田氏の原稿は1983年のもので「おしゃもじ様」として市内の4カ所を紹介しています。その後高田の個人宅に「杓子大明神」と刻んだ駒型石塔があることがわかっています。今宿の風邪神、芹沢にもぎやーぎばあさんがあり風邪・咳の神として知られています。

蛇足です。私が生まれた横浜市西区に洪福寺という寺があります。開山吞海、本尊薬師如来は鎌倉権五郎景政の守り本尊と伝えられ目洗い薬師ともいわれています。この寺に祀られている「社宮司神」は近年眼病治癒の神とされています(西区ホームページ)。

さらに、同じ区内にある杉山神社は横浜市内

最古の神社で市内唯一の式内社(候補)といわれている神社ですが、その境内にも「社宮祠社」(洪福寺は司、杉山神社では祠)が祀られています。こちらは、咳・喉の病を治す神様です。「おしゃもじ様」はなぜ咳・喉の神様なの?と質問がありました。広辞苑では『石神(いしがみ)、奇石・霊石・石剣の類を神体として祀った民間信仰の神。記紀にもみえる。「しゃくじん」と解説。『しゃくじん』(関東や中部地方)石を神体として祭った祠。良縁・安産・子育て、などに霊験がある』以上が広辞苑の引用です。石神は(せきじん)ともいう。せきじんの「せき」には「咳」「堰・関」が当てられます。ということ、咳神とされ、「堰・関」は「境」の役目をするので道祖神とつながり安産・子育て・子孫繁栄・和合の象徴として陰陽石を祀ることもつながるようです。この先は柳田国男『石神問答』などを参考にしてください。



茅ヶ崎の神社彫刻(その4)

円蔵、神明大神の彫刻 平野 文明

朝潮関、天の磐戸(あまのいわと)を引き開ける

私が子どものころに、朝潮という名のお相撲さんがいました。タイトルも荒すじも、出演していた俳優さんたちの名も忘れたのですが、この朝潮関がアメノタヂカラオノカミ(天手力男神)に扮して天の磐戸を引き開けて、アマテラスオオミカミ(天照大御神)を磐戸から引つ張り出す映画を見ました。

子どものころに私が住んでいたのは九州は熊本県の小さな田舎町でしたが、映画館が二館もあって、二両仕立てのディーゼル列車が熊本市とを結んでおり、今よりも活気がありました。ネットでその映画について調べてみると、昭和三四(一九五九)年一〇月に封切られた『日本誕生』という映画でした。朝潮関は身長が189センチあった大型力士で、同年五月から三七(一九六二)年一月まで第四六代横綱をつとめたそうです。力持ちの役にぴったりだったのでしょう。人気力士でもありました。ヤマトタケルとスサノオを三船敏郎が二役で演

じたスペクタクルで、東宝が製作本数、千本の記念作品として作った力作だったとも書いてありました。

アマテラス、磐戸に隠れる

どういふことからアマテラスが磐戸に隠れたかということはよく知られた物語であります。古事記から引用しますと、黄泉国(よみのくに)にいる母神イザナミノミコト(伊邪那美命)をしのんで泣き叫ぶスサノオを、父神イザナキノミコト(伊邪那岐命)は、ここには置いておけないと追放します。スサノオは出立つ前に、姉神アマテラスに会おうと高天原(たかまのらは)に昇りますが、そのときの足音が地を揺るがすものだったために、姉神は弟神が攻めてきたと勘違いして重装備して迎えます。ここで姉と弟の間で、一種の問答が行われ、スサノオの予言が当たって姉神の誤解が解けます。(姉弟神の誓約(うけい)については『ちがさきの石仏』14号に紹介しました。)

勢いに乗ったスサノオは、姉神がつくる田の畔(あぜ)を壊し溝を埋め、姉神の祭殿に尿(くそ)をまき散らしました。あげくに、アマテラスが神のころもを織る服屋(はたや||機屋)の屋根を壊して、そこから天の斑馬(あめのふちこま||高天原にいる馬)を逆剥(さかは)ぎに

して投げ入れたため、中にいた機織りの少女が驚いた拍子に機織り道具の梭(ひ。ダンボール織機ではシャトルというようです)で自分の陰上(ほど)をついて亡くなるという事態になってしまいます。

アマテラスとスサノオの関係は、出来のいい姉と両親もさじを投げたどうしようもない弟という、我々人間界ではどこにでも見られる二人のように、私には思えるのです。出来のいい姉神もさすがに頭にきて、「もう、しらない!」と籠もったのが高天原にある岩窟、天の磐戸だったのです(古事記には「天の石屋戸」と書かれています)。

アマテラスが磐戸に籠もると世界はどうなってしまうのか。高天原も葦原中国(あしはらのなかつくに)も真っ暗になってしまいました。神々は高天原に、人々は葦原中国に、死者は黄泉国(よみのくに)に居るのですが(黄泉国は元々暗黒世界でした)、世界中から一切の光がなくなったのです。そしてありとあらゆる悪いことが出現したのだそうです。

アマテラス引く張り出し作戦開始

困った事態を迎え、八百万の神(やおよろずのかみ)はオモイカネノカミ(思金神)の主導によって、天の安の河原(あめのやすのかわら)

に作戦会議を開きます。常世の長鳴鳥(とこよのながきどり)を鳴かせて夜明けを告げさせる。真賢木(まさかき)を掘り採ってきて、その上の枝にたくさんの勾玉、中枝に大きな鏡、下枝には「しで」を掛ける。アメノコヤネノミコト(天児屋命)が祝詞を唱える。タヂカラオが近くに控えて磐戸を引き開けるチャンスを窺う、等々の作戦を立て、いよいよアメノウズメノミコト(天宇受売命)が天香山(あまのかぐやま)の笹束(ささたば)を持って、ひっくり返した桶の上で「胸乳をかき出で裳(も)ひもを陰(ほど)に押し垂れて」、神がかりして乱舞したところ、八百万(やおよろず)の神はヤンヤの喝采。その騒々しさに、「なんか面白そう、どうしたの?」とアマテラスが少し磐戸を開く。すかさずアメノコヤネとフトダノミコト(布刀玉の命)が、真賢木に懸けてある鏡を差し出しピカリとさせる。なおも不審に思うアマテラスが一步を踏み出したところを、タヂカラオがその御手をとってどうとう引く張り出す。二度と岩屋に籠もれないように、フトダノミコトが入口に注連縄を引き回す。そして作戦は成功裏に終了しました。

この世に光が戻りました。混乱事態を引き起こしたスサノオは重い重い戸を背負わされ、鬚

(ひげ)を切られ、手足の爪を抜かれて高天原から追放となりました。

天の磐戸開きの彫刻と今回のクイズ

前置きが長かったのですが、本論はこれからです。紹介した磐戸開きの場面の彫刻が、市内円蔵の神明大神にあります。神社は県道四五号丸子中山茅ヶ崎線の円蔵北交差点を東に入って約200メートルのところ。神社の社殿などにある彫刻のテーマはその神社の祭神に關係あることが多いと以前述べたことがあります(15号)。ここでもこのことが言えて、神明大神の御祭神はアマテラスオオミカミです。さて、先に申しあげておきますが、今回もクイズがあります。もう少し続きをお読み願います。(ただし、クイズを解いても何も出ないのですが。)



神明大神 拝殿

拝殿正面の向拝(ごはい・こうはい)のむくり屋根の下に鳳凰、左右の柱を結ぶ横材の上に磐戸開き、その上に龍の彫刻があります。磐戸開きの彫刻は、中央にアメノウズメ、彼女の右側にタヂカラオ、ウズメの後ろはアマテラスです。ウズメは右手に鈴、左手にたくさん紙垂(しで)を垂らした幣(ぬさ)を持ち、坐った形で、袴のようなものをはき、胸元も腰紐も堅く結んでいます。お顔も凛々しく「古事記に書いてあることは間違いよ。フン!」と言っているかのようです。



鳳凰と龍と磐戸開きの彫刻

天の磐戸の場面 (アマノイワト)



古事記には、おっぱいなど露(あら)わのウズメの踊りに八百万の神々は大喜びだったとあるのですが、不思議に思えるのは、真つ暗な中でどうしてウズメの踊りが見えたのかということです。神々だから闇夜を見通す神通力をそなえていたのでしょうか。ならば光がなくなってもそんなに困ることもなかったでしょうに。アマテラスとスサノオもそうですが、太古の八百万の神々は我々に似たところがあったものです。喜んでいいのか悲しいのか。話を元に戻して、タヂカラオが抱えているのは引き開けた磐戸でしょう。足を踏ん張って、

の力強さです。奥の方からアマテラスが出現しています。羽のように左右に延びるのは光です。磐戸を引き開けた瞬間を見るようです。ニワトリにそっくりですが、オス・メス二羽のトコロノナガナキドリも右はしにいます。

さて、クイズです。

ここに一人(神様だから一神というべきでしょう)が)正体が分からない神様がいます。私たちが向かって場面の右側、ウズメからいえばその左側の神です。その「なぞの神」は左手に紙垂を付けた剣か杖を持ち、歌舞伎の見得を切った形で踏ん張っています。古事記のこの場面に現れる神々はそれぞれ役目があるのです

が、この「なぞの神」は何をしているのかも分かりません。つまり古事記のこの場面には書かれていない神なのです。この神はいつたいだれなのか?なぜにここに現れているのか?これが今回のクイズです。ヒントは鼻が天狗のよう高いことです。

さて話題は変わりますが、かつて円蔵に高橋鯛五郎という神楽師がありました。『茅ヶ崎ゆかりの人物誌』(一樹会編著・平成九年市教委刊)によると、慶応二(一八六六)年の生まれ、昭和三一(一九五六)年、九〇歳で没。もうこの人のことを知る人も少なくなつたことでし

ようが、県下にたいへん有名でした。彼が活躍するころは、村々の神社の祭礼にはよく神楽が奉納されてきました。歌舞伎芝居も得意だったようですが、「スサノオのヤマタノオロチ退治」「天の磐戸」「三番叟(さんばそう)」などの神楽を演じると「日本一」の声援が乱れ飛んだといわれています。舞台衣裳などは早稲田大学の演劇博物館に収められているそうです。アマテラス出現の場面などは得意中の得意だったことでしょう。

クイズの解答

なぞの神はサルタヒコです。しかし、先ほども書きましたが古事記の天の磐戸開きの場面にはサルタヒコは登場していません。日本書紀でも同じです。サルタヒコは古事記では猿田毘古神(さるたびこのかみ)と表記されて、ニニギノミコトの降臨(こうりん)の場面に現れます。それが、なに故に円蔵の神明大神の彫刻にデザインされているのか。という問題について述べる余裕はもうなくなりました。機会があれば別に記したいと思います。

(平成二四年一月二二日)



文化資料館と活動する会／民俗行事部会

行事報告(八日ゾー)

昨年は東日本大震災の影響で予定した行事がほとんど出来ませんでした。昨年の十二月十日(土)に「八日ゾー」を実施いたしましたので報告します。

八日ゾーという行事は馴染みが無いと思いますが、茅ヶ崎でも七十〜八十年前頃まで行われていた民俗行事です。茅ヶ崎市など関東地方の一部では、十二月八日と二月八日の夜、山里から出てくる「目一つ小僧」と呼ばれる疫病神を追い払うために、籠やそばすくいを軒先に掲げるという風習がありました。これが「八日ゾー」といわれる行事です。



竹で出来ている籠やそばすくいには「メ」がたくさんあり、「メ」と人間の「目」が同音であることから、目一つ小僧を驚かせるための道具として使われるようになったと言われています。

目一つ小僧は、十二月八日に村中をまわって歩き、戸締りを忘れた家や悪い子の名前を帳面につけ、次の年にどこの家の誰を病気にするかを決めると言われています。そして、帳面はこの日道祖神に預け、翌年の二月八日に取りに来るとされており、疫病神が誰にも取り付かないようこの帳面を一月十四日の晩に燃やしてしまふという伝承があります。それが、「どんど焼き」、「さいと焼き」、「左義長」と呼ばれている火祭りの民俗行事です。

民俗資料館(旧和田家)を活用して「八日ゾー」の行事を実施し、今回で三回目となります。今回の特徴は中学生(寒川町立旭が丘中邦楽部)による琴演奏があったことです。活動記録は次の通りです。

①十時三十分頃にスタッフは集合し、旧和田家の軒先に目かごを掲げるとともに、道祖神パネル(市内外の特徴有る道祖神写真)・行事食(小豆飯・蕎麦・豆腐汁)・目一つ小僧人形を展示した。これらの展示品は部会員が手作り

準備したものです。

②十一時頃から親子対象の工作がスタートした。紙コップ、型紙や色紙を活用した目一つ小僧作りは室内で、紙トンボ作りは庭の陽だまりで行いました。部会員のK・Eさん手作りの紙トンボはいろいろな形があり、大人も子供も興味深く楽しそうに飛ばしていました。

③十一時四十五分頃から琴演奏が始まり、メンバーは二年生二人、一年生九人という構成でしたが、寒い中、雪花・富士山・KOTO・故郷などを一生懸命に演奏され、午前の部が終わったのは十二時四十分頃でした。

④午後一時二十五分頃から目一つ小僧の紙芝居が庭の陽だまりで行われ、二時過ぎまで続けられました。部会員のK・Kさんの自作自演の紙芝居は、その素晴らしい語り口に集まった親子が引きずり込まれていました。

⑤午後の部の琴演奏が午後二時過ぎに始まり、寒さが厳しくなる中、二時五十分頃まで一生懸命に弾かれていました。

*八日ゾーは十二月という寒い時期の行事のため参加者が少ない傾向がありますが、忘れ去られようとしている年中行事を再現し後世に伝えようという活動は、他の年中行事とあわせ意義のあることと考えておりますので、これ

からも続けていきたいと思っています。



(文化資料館と活動する会)

民俗行事部会 K・K



「めでたい着物展」実施報告

文化資料館 佐藤 彩

茅ヶ崎市文化資料館では、平成二十三年十月二十二日(土)から十二月十八日(日)まで、「めでたい着物展」を開催いたしました。来館

者数は一九八〇名でした。

この展示会は、茅ヶ崎市文化資料館開館四十周年記念の展示会として開催したもので、市民ボランティアスタッフである「資料館と活動する会(民俗行事部会)」のメンバーと企画・展示しました。企画にあたり、資料を一点一点確認する作業をおこないました。それは、寄贈いただいた資料が持つ時代背景、着ていた人の物語、親が子どものために用意した着物の縫い目ひとつひとつに込められた想いを想像しながらの作業となり、多くの発見がありました。また、会期中にいただいた来館者の方々からの声も展示会担当者として多くの学びがありました。着物を日常的に着ていた世代と、大きな節目の行事でしか着たことのない世代とは、展示資料を見る目が異なるのが印象的でした。ここに展示会の報告として、その一部を紹介いたします。

(来館者の声抜粋)

(七〇代の女性)

昔は結婚式は家でやっていた。近所中の人が集まって、どんなお嫁さんが来たのか見に行ったものです。お嫁さんのもってきた嫁入り道具が広げてある部屋があって、ああ、こんな人なのか、とか噂したりしたものです。

(七〇代の女性)

女性は黒の喪服一枚あれば良くて、おばあちゃんが私の結婚式に黒の喪服を出してきたので文句を言ったら、見てなさいといってその場で銀と緑の糸で松葉をすすすと縫った。それで留袖のできあがり。

昔はたくさん着物をもっていたが、ほとんどが空襲や、戦後の引越しなどでなくなってしまった。

(七〇代の女性)

私は田舎の農家の出なので、おばあさんが繭から糸をほごして織って反物に仕上げるのを近くで見っていた。色を染めるのを外注するくらいで、昔は全部自分たちでやっていたものです。

私は平塚の農家の出身だが、織り機は一家に一台はあって、おばあちゃんが機織りをしているのを見てそだった。明治の頃の着物は自宅で織っていたのがほとんどでは。縦縞の長着が多かった。

(七〇代の女性)

赤ちゃんが生まれて、おばあちゃんが産着を

作ってくれた。ウコン色に染めてある。今でも大事にとっておいてある。

こどものお宮参りに、私も背守り(せまも)(※産着の後襟下につける縫い飾りのこと。新生児に災いがかからぬように願う呪いの意味がある)をつけた。他にも、そのままずばりのお守りを付ける人の話や、食べるものにこまらぬように、と袋に小豆をいれたという話を聞いた。



一見、思いつき話ともとれる感想は、五十年もすれば、文字でしか知るすべのない話になるでしょう。来館者の方々からの一言一言の感想は貴重な記録となります。

展示会は、開館四十周年を記念し、茅ヶ崎市文化資料館が所蔵する衣類の中でもめめたいものを中心に展示をし、皆様に披露することが趣旨であり、それは、博物館でものを収集し、

保存する意味―展示会場ではそれを「モノ」を集めて「コト(記憶)」を保存する、と表現―を伝えるための一つ的手段でした。

博物館は、個人コレクションとは違い、社会や地域のニーズ、あるいは学術的な研究に基づき計画的かつ合理的にモノを収集、保存していきます。それらをテーマに沿って展示をすることで、新たな価値や感動を生みだします。今回の展示では「モノ」は展示した「着物」であり、「道具」でしたが、「コト(記憶)」は、展示されている「モノ」に付随する民俗的な情報であり、更には今回ご来館いただいた方々からの前述のようなコメントもすなわち大切な「コト(記憶)」となります。

今後も、茅ヶ崎市文化資料館では茅ヶ崎市にまつわる「モノ」と「コト(記憶)」を収集・保存しながら、次世代に伝える役割を担っていきます。



編集後記

多くのご投稿をいただきまして、「ちがさきの石仏」第十七号を発刊するにいたしました。皆様そろっての熱心な執筆に感謝の意を述べさせていただきます。

金子氏の投稿では、「おしゃもじ様」を入口に、音の響きの面白さ、先人たちが持たせた意味のつながりの妙味に気付かされます。

平野氏の投稿では、古事記の物語の引用が非常にわかりやすく語られ、それは茅ヶ崎市内の神明大神の彫刻につながっていきます。

また、今号では民俗行事部会の活動報告をK・Kさんから、展覧会報告を資料館職員佐藤よりおこないました。巻末の〈お知らせ〉のとおり、「ちがさきの石仏 石仏調査ニュース」は今号を持ちまして刊行終了となりますが、新しい媒体を通して、これからも石仏調査に関わるニュースをお届けしていきますので、応援よろしくお願いいたします。

(文化資料館 佐藤 彩)

※ご不明な点等ございましたら、1頁に記載しております連絡先にご連絡ください。なお、本誌はバックナンバーを含めすべて茅ヶ崎市文化資料館のホームページで公開しております。

(<http://www.city.chigasaki.kanagawa.jp/kankou/8137/010670.html>)

石仏調査ニュース ちがさきの石仏 刊行終了のお知らせ

「ちがさきの石仏 石仏調査ニュース」は、今号を持ちまして刊行終了といたします。長らくのご愛読、ありがとうございました。前号の「ちがさきの石仏 石仏調査ニュース」一六号では、今号よりタイトルを「茅今昔(かやいまむかし)」と改題し、内容もこれまでと変わって茅ヶ崎にまつわる話題を掲載すると発表いたしました。より発展的な内容とするべく、平成二十四年度より茅ヶ崎市文化資料館館報として「文化資料館通信(仮題)」を発行する運びとなりました。「文化資料館通信(仮題)」では、資料館で行っている活動予定や報告、茅ヶ崎市文化資料館と活動する会(考古・自然・民俗の三分野)の活動や発見などを随時掲載予定です。また、読者の皆様からの茅ヶ崎の自然・考古・民俗などにまつわる投稿もお待ちしております。

